ゆたかの飛耳長目（第１回）要旨

日時	令和４年 ７月 13 日（水） 午前９時 30 分～
場所	㈱マイグラント
テーマ	安曇野市におけるシェアハウス活用の可能性
参加者	シェアハウス経営者 ５人

●シェアハウスは移住に向いている？
（経営者）移住するためには、新天地での住まいや仕事などを見つける必要があり、そのためには最初の足掛かりとなる『場所』が必要。家を探すために、先にアパートなどで暮らす人も多いが、1人でアパートに住むよりもシェアハウスの方が人とのつながりもあり安心感があるし、さまざまな情報交換もできるので適している。
（市長）皆さんのところを経由して、これまでどれくらいの人が移住しましたか？
（経営者）民泊とシェアハウス含めて2年くらいで10人くらい。
（経営者）15年と長くやってきたので、30～40組ほど。短期間宿泊するお客さんについても、月 2～3人は移住相談に乗っている状況。
（経営者）半年だが、移住された方は2人。2拠点生活されている方も結構いる。
（経営者）コロナ禍もあり、最近は移住したい方と、テレワークの方が増えた。また、定住場所としてだけでなく、夏の期間だけ来て山に登りたいなどといった需要もある。
（市長）シェアハウスがこんなに移住の窓口になっているとは思ってなかったです。移住相談員の称号を皆さんに差し上げなくてはいけませんね。相談員というのは、移住に関して本当に分かっている人じゃなきゃ難しい。また、地域に馴染んでいくためにも、お世話役みたいな感じで、ずっと相談に乗ってくれる人が地域にいることが移住にとって大事ですよね。
（経営者）安曇野は良い場所って、言われなくても勝手に宣伝しちゃう。僕らがそれを日々感じながら暮らしているから。シェアハウスを出発してどこへ行くのっていう時に、次探すのは家。シェアハウスの人たち、運営者に、空き家の情報が集まれば、さらなる空き家活用が進むと思う。

●空き家の活用について
（経営者）私たちも空き家の情報は欲しい。できれば、賃貸で貸してくれるところがあればさらにいいと思う。いきなり空き家購入はハードルが高い。不動産屋さんだと、家主さんの荷物が残っている状態で貸すのは認められていないと思うが、実は、荷物がある程度残ってしまっている状態でも良ければっていう家主さん、お付き合いの中で貸してくれる人は多くいるように感じている。そういう人と人が、つながれればいいなと思う。

（市長）移住は初期投資が高いので、若い人は特に厳しいですよね。
（経営者）売買だけだと買える層が限られる。だから、若い人の層にシェアハウスの需要がある。
（市長）そして、リタイアされた方が来た場合も、どうやって安曇野に住んでもらうのかを考えなくては。仕事はあまりしない、趣味で暮らしたいという人のために、移住の窓口を拡げなくてはと思っています。有明地域は、結構空き家になった別荘が多いので、そういうところの借り上げをするといった手はあるかなと思っています。
（経営者）森になっていて見えにくいかもしれないが、空き別荘はたくさんある。ただ、日本中の人が所有者で、持ち主を探しようがない。ああいうところは、行政で調査してもらえればありがたい。使えそうな所を修繕して、シェアハウスだけでなく、活用できる。
（市長）最後には不動産業者に入ってもらった方がいいが、空き別荘のリストアップが必要だとは感じています。
（移住定住推進課長）現在、空き家となっている1,000軒くらいの所有者にアンケートを送ったが、3～4割しか返ってこない。その中で、どれだけ所有者が利活用してほしいと望んでいるのか分かると思う。あと、市はマッチング（空き家を使いたい人と使ってほしい人の引き合わせ）も進めていて、30件近く「使いたい」という要望はある。しかし、相続がうまくいかない、片付けができていないことから、空き家の再活用を断られてしまうことが多いのが現状。

●実際に安曇野へ移住してみてどうか？
（経営者）東京から移るから何か一つくらいデメリットがあると思っていたけど、暮らすことに不便はなかった。
（市長）東京時代のお友達とか、移住したことについて何か言ってますか？
（経営者）羨ましがってますね。悠々とやってるね、楽しそうにやってるね、みたいな。
（市長）安曇野って、テレワークにしても、東京でやっている仕事を移すにしても、そのままぎちぎちに働くってイメージとは違っていいと思ってるんですよね。ゆるやかな時間の中で、もちろん仕事は生活を立てる上で必要だけど、それ以外にもう一つのプラスαの自分を持っていた方がいいと思います。
（経営者）最初来た時は、東京での仕事もするんだろうと考えていた。東京なら3時間くらいで行けるし、週1くらい行ってもいいと思ってた。いざ安曇野に来てみると、こっちの仕事で回ったっていうのが、嬉しい誤算というか。そして、地方では、いろんな仕事をしている人がいて、仕事って1つじゃなくていいんだなと感じた。思っていたのと色々違ったけど、いい方に違ったっていう。すごく失礼な話ですが、地方には仕事がないとどこかで思ってました…。
（市長）そこが大きなポイントなんですよね。特にクリエイティブな仕事をやっている人は、PCがあればどこでも勝負できるっていうのは分かるんだけど、そうじゃなくても安曇野でそういうことができるって認識を広めていってもらいたいと思います。お友達にぜひ紹介してください。

●シェアハウス活用の可能性
（市長）最初は民泊、その後ちょっとシェアハウスで住んでみようってなり、最終的に移住する、といったラインができていればいいですね。必ずしも、そこに辿りつかなくても、ひと夏だけでも安曇野に来てもらうってことでも全然良いんですけどね。
（経営者）今までなら、夏に4泊、5泊、一週間過ごしたいって時に、泊まる場所っていうのが宿泊施設しかなかった。3食温泉付っていう、そういうことを求める人たちももちろんいるが、そうじゃなくって安曇野でもっとひと夏過ごしたいんだ、暮らしたいんだ、もう一つのふるさとを作りたいんだ、っていう想いの人たちの受け皿が無かった。それが、シェアハウスっていう、我々も暮らしている場の中に受け入れることができて、その人たちのニーズに応えられた。逆に言えば、そういうニーズに絡めた施策を作って、交流人口を増やせるんじゃないかなっていうのが私の想い。
（市長）多分そうですね。知らない土地を歩くだけじゃなくって、ちょっと住んでみたいなって欲望があって。今まではホテル10泊だった訳だけど、それに対してもっとゆるやかな形で、シェアハウスに滞在して、ある日はぼーっとして、ある日は仕事して、ある日は観光してもいいし。そういう新しいライフスタイルの一つとして、シェアハウスの活用がありますよね。安曇野はそれができる、そういうのっていいですよね。
（経営者）「移住」をキーワードに、市と民間がお互い協力関係にあればいいと思う。例えば、市役所に移住相談に来た人に、市内のシェアハウスを紹介する、営利目的というよりは、協力関係にあるっていう形で紹介していただけたら。シェアハウスごとのカラーもあるので、そういうのも添えて市で案内してもらえたら、来る方も自身の需要にあわせて選べる。そういう環境があると、来た人も嬉しいと思う。今はないですよね？
（市長）共通パンフ作りましょうか。
（移住定住推進課長）そういったつながりを持てると市も嬉しい。安曇野を知るには、まず人だと思う。移住となると、どういう人たちが住んでいるのかなどを知りたくなる。仲間が欲しいという相談もあるので、その時にシェアハウスをお伝えすると、また発展していくと思います。
（市長）安曇野にシェアハウスがいっぱいあって、色んな人が来て試してもらって、そういう人たちがみんな母体となって生まれてくというのは非常にいいイメージ。しかも、急に来て移住してみたら変なところでしたじゃなくて、来てみたらいいところなので住みましたなんて、本当に軟着陸も一番いいと思いますね。